

---

# 楽園の果て

翠月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽園の果て

### 【Nコード】

N1009X

### 【作者名】

翠月

### 【あらすじ】

「あなたは、？神様？なのですよ」  
突如記憶を失った少女。

彼女は楽園と呼ばれる国の？神様？と呼ばれるものだった。

異世界で起こる、恋愛ファンタジー。

## <1>（前書き）

ゆっくりなペースになってしまいかもかもしれませんが、完結させられるよう頑張ります。

これはオリジナルです。無断転載などしないよう、お願いします。誤字脱字等がございましたら、遠慮なく言ってください。

< 1 >

緑豊かな草原。

どこまでも広がるその大地。

その一部に、少女が一人倒れていた。

綺麗に伸ばされた漆黒の髪が無造作に散乱し、力無く腕や足が伸びている。

一見すれば、死んでいるのかと思うほどだ。

白く透けるような肌を風がふわりと撫でる。

少女は閉じた瞳の奥で、混乱したように目を泳がせていた。  
動かない。

目を開けようとするが、どれだけ力を入れても目蓋が持ち上がらない。

指に力を入れても、目蓋同様、動かないのだ。

まったく言う事の聞かない体に、少女の不安は増してゆく。

自分の身に、何が起きているのだろう。

ただ唯一分かるのは、自分の体がとてつもない疲労感に覆われているということ。

ここがどこなのか、なぜ自分がこんなにも疲れ、倒れているのかさっぱりわからない。

自分の、名前さえも。

「っ……！！」

瞬間、強烈な目眩に襲われ意識が薄れていく。

意識が途切れる寸前、自分の体に当たる風がピタリと止まった気がした。

次に少女が目覚めたのは、白く柔らかなベッドの上だった。

<2>

ぼんやりと薄っすら目を開けた先に見えるのは、白い天井。

少女は背中にあたる柔らかな感触に体を預けた。

先ほどより疲労感は軽減しており、体も自由に動くようになっていた。

腕に力をいれ、ゆっくりと体を起こす。

そして部屋を見渡し、小首をかしげた。

窓から吹く風になびく白いカーテン。小さめのサイドテーブル。

服が何着も入るであろう大きなクローゼット。

見たこともないものばかり。

少女はふと視線を落とし、自分の着ている見慣れない服にゆっくりと手を伸ばした。

肌触りのいい布地。

少女が着ているのはゆったりとした、柔らかな生地で作られた服。あまり装飾はなく、シンプルといえるものだった。

けれどこれも、やはり知らないもの。

目に映るすべてのものが、少女の記憶には無い。

「ここは」

「お目覚めですか？」

ちいさくつぶやいた彼女の声に、優しげな声が重なる。

音をたてずにドアを開けて入ってくるのは、まだ幼さの残る少年だった。

「よかった。起きてても平気そうですね」

ベットの横にちょこんと置かれるサイドテーブルにタオルを置き、少年は続ける。

「カイ様が見つけて……ああ、カイ様にご報告をしておかなければ」  
軽く手を打ち、少女へと向き直った。

優しげな瞳を向けられ、少女はたじろいだ。

「三日間も寝ていらしたんですよ？ それに、あんなところに倒れていらして……」

そうだ。

自分は倒れていたんだと、少女は思い出す。

けれどどこではわからない。酷く疲れ、動けないほど疲労していた自分。

それを、ここまで運んできてくれた人がいるということなのだろうか。

そうなれば見知らぬベッドで寝ていたということも、説明がつく。

「どうなされました？」

俯き、己の手を凝視していた少女を覗き込む。

思考の波に飲まれていた少女は我に返り、小さく首を振った。

「あの……」

「はい」

「ありがとうございます」

突然礼の言葉を言い出した少女に少年は目を瞬かせる。

「ここまで、運んできてくださって」

見も知らぬ相手を、ここまで運んできてくれたのだ。

もしかすれば、誘拐ということもあるかも知れない。けれど目の前の少年からは優しさしか感じられない。

それは酷く慕っていた相手に向けるほどの。

丁寧に会釈する少女に、少年が困惑の瞳を浮かべた。  
おかしい。

少女から感じる小さな違和感に少年は戸惑った。

「フィリア様……？」

少年の口から紡ぎだされる名。

それはこの国にいる、？神様？と呼ばれる少女の名。

「本当に、覚えていないのですね？」

「はい……すみません」

白衣らしき物を着た皺だらけの老医者言葉に、少女は申し訳なさそうに頷いた。

「謝ることではないですよ」

ゆったりとした、温かみのある声に再び少女が頷く。

医者は座っている椅子から腰を浮かし、体を反転させる。

「やはり、記憶喪失ですね……どうなされますか？」

「どうするもこうするも、なあ……」

小さく開かれた医者目に映るのは、項垂れた少年が三人。

そのうちの一人が、ちいさく呟き椅子から立つ。

「失った記憶を取り戻す手立ては、あるんですか？」

少女に寄り添うように座る少年が不安げに聞いた。

先ほど、彼女の部屋へと訪れた少年だ。

少年は少女の様子に違和感を感じ、医者呼び、ここにいる二人の少年も部屋へ呼んだ。

そして医者が診察し 出た答えが、

「記憶喪失ということは、なにかの拍子に思い出すしかないだろうな」

椅子に腰掛ける整った顔立ちの少年が言う。

数秒の沈黙を置いて、椅子から立っていた少年がうめき声をあげた。

「あー、もう！！ っていうかなんで記憶喪失になったんだよ！？」  
苛立った声を発し、力任せに汚れひとつ無い床を蹴る。

鈍い音が響き、痛みが足へと伝わる。それさえも、今の少年には苛立ちへと変わった。

「それはですね、カイ様」

小さく唸る、カイと呼ばれる少年に医者が声をかけようとしたとき、

「あの……」

話の中心である少女がおもむろに口を開いた。

宙をさまよっていた複数の視線が、一斉に少女に向けられる。

「あ、あのっ……私……」

向けられた視線にうろたえ、徐々に小さくなる声。

困惑した瞳は左右に揺れ、言葉を探すように口はちいさく開閉している。

「わ、私……」

少女は口ごもる。

どうすればいいのかわからなかった。

どこかに倒れていた自分をここまで運んでくれたんだろうと思っていた。

けれど、突然医者を呼ばれ、あれこれと色んなことを聞かれた。

そのすべては、自分の知らないことばかり。

知らないはずの目の前にいる少年たちは、優しさや慈しみのある瞳で自分を見る。

何が何だかわからない少女は、ただその視線に戸惑うばかりだった。

「フィレア様。あなたには記憶が無い。どうして記憶を失うことになったのかすら、わからないのでしょうか」

「え……？」

医者は言葉を紡ぐ。

いまだ困惑し、怯えた表情をしている少女に優しく言い聞かせるように続けた。

「あなたは、フィレア・リン・ローディア。この国の神様なのです」  
「よ」



< 2 >

少女は医者をまじまじと見た。

からかっているのだろうか。記憶が無い自分を。

「疑いをお持ちですか」

苦笑する医者に、少女は口を引き結んだ。

疑いがないという方がおかしい話だろう。

「嘘ではありませんよ。からかっているわけではありません」

まるで彼女の心を見抜いたかのように、医者は言葉を続ける。

「フィレア様。それがあなたの名です」

「フィレア……？」

それが自分の名前だと。目の前の医者は言うのだ。

戸惑いつつも何度も口の中でその名を転がす少女      フィレアを

見ていた少年たちは微笑する。

「では、フィレア様      」

「フィレア様！！」

腰を浮かした小柄の少年の声に、甲高い少女の声が重なった。

扉が壊れそうなほど勢い良く開け、その勢いのまま両腕を広げフ

ィレアに抱きついた。

「フィレア様！！      よかった、ご無事で……！！」

力強く抱きしめ、半ば固まっているフィレアを何度も抱きしめる。

「ああ、本当にご無事で……！！」

「エ、エレナさん！      ちょ、ちょっと！」

一度放し、そして再び抱きしめようとした少女、エレナを少年が慌てて止める。

「なによ、カルサ」

止めに入った小柄な少年、カルサをぎろりと睨みつけた。

吊り上がったエレナの目に、びくりとカルサが震える。

「あのっ……」

エレナに抱きしめられ、その腕の中に埋もれているフィレアがもごもごと必死でなにかを訴えた。

「あ、あの！」

苦しい。

必死で少女の腕をほどこうと暴れていると、フィレアがほどくよりも先に彼女の体に絡まっていた腕がするりと抜けた。

「す、すみません。つい」

エレナに開放され、安堵するフィレアに頭を下げた。  
下げた頭を戻す際、無造作に束ねられた髪が揺れる。

フィレアは酸素を肺に送り込み、何度かむせた後目の前にいるエレナに視線を戻した。

見た目は、同じ年くらいだろうか。

少し気の強そうな目をしていて、動きやすさを主した作りの服装で所々なにかの汚れの跡がついており、作業中だったのか袖は捲くられ白い腕が露になっていた。

エレナは見つめてくるフィレアに不思議そうな顔をし、すぐになにかを思い出したように言葉を発した。

「忘れておられるんですね。……私はエレナと申します」

「エレナさん？」

につこりと微笑むエレナの表情に、少しだけ悲しさのようなものが見えた。

それはここにいるフィレアを除く全員の表情に表れているもの。

フィレアはその表情の意味を探ろうとしたとき、

「フィレア様、また後日来ますが……くれぐれも無理はなさらないように」

まるで懐かしむような眼差しでフィレアたちを見ていた医者には念を押し、荷物をまとめて部屋から出て行った。

扉が閉まると同時に、エレナはフィレアの手を取り立ち上がらせる。

「ではフィレア様！　まずは御召しかえですね！」

そう声を弾ませたエレナは、少年たちを部屋から追い出し大きな  
クローゼットを豪快に開けた。

「ささ、これなんてどうですか？」

エレナの手に持つているフリルが数え切れないほどついているワンピースに、フィレアは勢い良く首を振った。

「そうですかあ……？ では、こちらなんかは？」

フィレアが拒否したことに気を悪くした様子はなく、また次の服を引っ張り出す。

けれど同じクローゼットの中に入っているのは、どれも同じようにフリルがつき、どこに着ていくのだと問いたくなるような派手なものばかりだった。

エレナはフィレアが気に入らなかった服を次々とベッドの上に放り投げる。

「わ、私はこっちの……」

エレナが覗き込むクローゼットの隣にある、もうひとつのクローゼットを開けた。

そこには今彼女の着るシンプルで動きやすそうな服が揃っていた。その中の一着を手に取り、自分の前に当てる。

「そんな質素なもの……」

これといった装飾もなく、殆どが無地の服を楽しそうに比べているフィレアに不満げに頬を膨らます。

「あ、これがいい」

たくさんある服を掻き分け、ひとつの服を手を取った。

他の服と同様、動きやすそうな、柔らかな布地で作られた服。城に住んでいる、いわゆるお嬢様などが着るようなドレスものではなく下町に住む民が着るような服。

自分の胸元に押し当て、満足そうに微笑むフィレアにエレナが苦笑じりのため息をついた。

「やっぱり、着てくれないのですねえ」

「え？」

「こちらのクローゼットにある服、すべて私が注文した服なんですよ。けれどフィレア様、一度も着てくださらなくて……」

だから、記憶をなくした今のフィレアなら着てくれるのでは思っただがやはり無理だった。

記憶は無くても、やはり彼女は彼女なのだ。

「フィレア様は、変わっていませんね。その服、一番のお気に入りだったんですよ？ よく着ていました」

今と全く変わらない、けれどフィレアの纏う空気が少し違っている。

以前のフィレアの姿がエレナの脳裏を掠めた。

「お気に入り？」

「ええ。なんでも動きやすいとか何とか……私は不満だったんですけど、カイ様とヴェント様はそれでいいって」

以前の彼女は服へのこだわりが凄かった。

動きやすさはもちろん、軽く、多少のことでは切れないものがないと、いつも服を注文している服屋にこと細かく言っていた。それでも気に入ったものではなかったときには、自ら下町へと足を運び、あちこちの店を物色しては買いあさっていた。

現在、記憶を失くしているフィレアの大人しめな性格と殆ど変わらないが、活発な一面を持ち合わせていたのだ。

やれやれというように、エレナは軽く首を振った。

フィレアは小首をかしげ、不思議そうにつぶやく。

「カイ様とヴェント様……？」

「はい。カイ様とヴェント様は、フィレア様を守る 守護する者なのです」

とある一室の扉を音もたてずに閉め、少年は息を吐き出した。

「どうした、カイ？」

「いや……」

カイと呼ばれる少年は虚を睨んだ。

「フィレア様が記憶を失くした原因って、俺たちだよな。ヴェント」  
「……」

ヴェントは顎に手を当てた。

「さっき医者に聞いたのだが、フィレアの着ていた服には大量の血がついていたらしい。だが、診察した体には傷ひとつ無いという」

「……俺も聞いた。？力？を使っただろうな。だから、記憶を……」

「そのせいかどうかはわからない」

「だけど、フィレア様を危険な目にあわせたのは俺たちのせいだろうか。守る、立場なのに」

代々、ローディア家の？神様？には二人の守護がつく。

それはローディア家の女が受け継ぐ？力？を狙ってくる輩から守るため、そしてさまざまな災厄から守るためにと、定められたからだ。

けれど、カイとヴェントはそれが出来なかった。

守るはずのフィレアを危険な目にあわせ、記憶を失わせた。

「カイの気持ちは分かるが、もうひとつそれ以上に重要なことがある」

鋭く細められた目が、カイを捕らえた。

「フィレアが傷を負ったという事は、誰かが傷を負わせたということだ」

「っ　……」

「また襲ってくる可能性もある」

「……城に、か？」

「どうだろうな。とりあえず、城の警備は厳重にしておく」  
ヴェントの言葉に、カイは頷いた。

踵を返し部屋から出て行ったヴェントを確かめ、手に持たれた短剣を少し抜き、ゆっくりと双眸を閉じた。

軽やかな足取りで、フィレアは目を見開かせてあたりを見回していた。

動くたびに彼女の胸にはちいさな金属音がする。

それはフィレアが起きた時から身につけられていたもので、エレナに聞くとそれは自分がとても大切にしていたものなのだと聞かされた。

見ただけで安物とわかるそのネックレスは、不思議と愛着がわく。どうしてこれを持っていたのか彼女にたずねたが、何も知らないという風に首を振るだけだった。

フィレアはそつとネックレスに触れ、視線を戻す。

広々とした空間に、楕円状の天井やいくつもある大きな扉。長く続く廊下に所々細かな模様が彫られている壁、全てが白を基調とした内装で、そこはまさに異国というものだった。

「そんなに珍しいですか？」

あちこちを見ては感歎の声を上げるフィレアにエレナは苦笑する。

「だ、だって……」

珍しいというものではない。

こんな建物はそうそう見れるものではないだろう。

「以前のフィレア様は慣れていらしたのですけれど」

「ねえ、その……私って、いなくなってたの？」

目覚めたとたんに大騒ぎになり、皆口々に無事でよかったと言っていた。

それは長い間自分がここにいなかったということ。

「そうですよ。ある日はったりと。どこを探してもフィレア様はおられなくて……皆で大騒ぎだったんですよ」

「それって、どのくらい……？」

「ちょうど一ヶ月です。本当に……今まで、どこにいらっしやった

んですか……！！」

一ヶ月。それはあまりにも長い時間。

その間、姿もない？ファイレア？を、何人の人が心配したのだろう。それを考えることは容易だった。

「ごめんなさい」

薄っすらと涙を浮かべるエレナに、ファイレアは謝った。

「もう、どこにも行かないでください……」

「うん」

何人の人が、どれほどの心配を　彼女も、その人たちの一人だったのだろう。

涙を拭い、気を取り戻したエレナは少し恥ずかしそうに笑い、

「次に行く場所ですけど、温室と図書館どちらがいいですか？」  
そう言つてファイレアの手を引いた。

楽園と呼ばれるこの国。

度々訪れる旅人から、そのまた旅人へ、この国に来た人たちが伝えていくのだ。あの国はまさに楽園だと。

国の象徴であるファイレアの暮らす城は、たくさんの設備が整えられ、一般の人でも開放されている場所がある。

全てを白を基調とした内装で、来る者は皆心を癒された。

さらに、このグランド国は驚くほど平和なのだ。

長い間戦争も無く、人々は平和に暮らしている。下町も、皆ほとんど不自由なく生活していた。ある一部の場所を除いては。

けれどそれは観光客や旅人が訪れるような場所ではなく、この国に住む民でさえもその場を避けるようにして一度と行くことは無かった。

そんな平和で綺麗なところを見て、？楽園？と呼ばれるようになったのだろう。

「図書館というよりも資料室と言ったほうが正しいですね。資料室にはたぶんエルダ様がいらっしゃるか」と

綺麗に掃除された廊下を歩きながら、ファイレアの歩調にあわせて



いるエレナが口を開く。

「じゃあ資料室からお願ひしてもいい？」

彼女の問いににっこりとエレナが微笑んだ。

可愛らしいその顔に、フィレアは頬を緩めた。

髪を無造作にくくり、服に対してあまり気を使っていないようだが、可愛らしい顔をしている。きっときちんと化粧をし、服を見立てれば見違えるほど綺麗になるだろうとフィレアは思う。

「さあ、着きましたよ。ここが資料室です。一般公開はされていませんが、今は時間外ですね」

周りとは浮きだつて見える古めの扉に、資料室と書かれたプレート。

この部屋以外はすべて綺麗にされているのに、ここだけがどうしてか古ぼけていた。

「ここに置かれている書類や本は量が多すぎるので、他の部屋に移したり出来ないんです。貴重なものもありますし、なくなったら大変ですからね」

フィレアの疑問に気付いたかのように、エレナは苦笑した。

ぎい、と音をたてて扉を開けた。

湿ったような、カビの臭いのようなものが鼻にまとわりつく。

「あれ、フィレア？」

その臭いに僅かに眉をひそめたフィレアの耳に、男の声が耳朶を打つ。

「フィレアと、エレナも。珍しいな」

たくさんの棚に、溢れかえるような本。その中に佇む男が片手を挙げた。

「えつと……？」

歳は二十歳半ばだろうか。慣れ親しんだように話しかけてくる男の口調にフィレアは言葉に詰まった。

自分が記憶を失っているということを、彼は知らないのだろうか。だとすれば、ここは言つたほうがよいのか。

「ああ、知ってるよ。記憶を失くしてるんだって？」

あれこれ考えている彼女に、男は優しく微笑みかけた。

「様子がおかしいって血相変えたカルサが言いに来たんだ」

「そう、なんですか」

「うん。だから気に病むことは無い。君のせいじゃないんだからね」

「……はい」

ちいさく頷くフィレアに、再びエルダは微笑んだ。

片方の手に持たれた分厚い本をぱたりと閉じる。

「自己紹介、したほうがいいかな？ 私はエルダ。情報処理のような仕事をしている。この城や国のことならすべて把握しているんだ」  
「情報処理？」

「うん。殆どこの資料室にいるから、何か聞きたいことがあればここに来るといい」

「は、はい。ありがとうございます」

につこり微笑んだエルダに、エレナは眉をしかめた。

「エルダ様には申し訳ないんですけど、私、ここはちょっと……」

「おや、エレナは嫌いかい？」

「き、嫌いというわけではないんですけど……この空気が、少し資料室には古い本が混じっているせいか、微妙な空気が漂っている。あまり本が好きではないエレナにとってはあまり好んで行く場所ではないだろう。」

言葉を濁したエレナに、男は苦笑した。

「ところで、なんでここに？」

「フィレア様を案内していたんです。それで、ここに」

「そうか。じゃあ、もう温室には行ったのかい？」

「いえ」

「今はきつと綺麗な花が咲いているよ。カルサが一生懸命育てたからね」

「……カルサはそれしか出来ませんから。もっと使えるようになるまで、私がこき使います」

嫌味をふくめて言うエレナを見、エルダは視線を動かした。

途中から会話に参加しなかったフィレアが、いくつもある棚に押し込められた本や書類を興味深そうに眺めている。

そんな彼女を見て、エルダは瞳を細めた。

どれもが微妙に模様が違い、けれど全てが白の数多くある部屋の  
一室で、老けた医者はずなっていた。

ぎしり、と木製の椅子がちいさく鳴く。

「なぜ、あんなところに……」

顎をなでて首をかしげていると、

「どうしたんだ？　ローマス」

扉を開け入ってきたカイは不思議そうに問う。

「おや、カイ様」

「フィレア様の服を持ってなにうなつてたんだ？」

フィレアの診察にあたっていたローマスの手にある、血まみれの  
服を見る。

血は今ついたばかりのように赤くはなく、時間が経ち黒く変色し  
て固まり、服はどこどころ切り刻まれ一番大きく裂けているのは  
背中だった。

そこには大量の血が　フィレアの血がついている。

「いえ。……フィレア様を見つけたのはカイ様ですよね？」

「ああ」

「なぜ、あんなところに倒れていらしたのでしょう？」

「あんな所？」

小首をかしげるカイに、老医者は静かに頷いた。

「ここから何キロメートルも離れています。しかも何もない草原で、  
フィレア様は一人でいらしたのでですよ」

カイの脳裏にあの日の映像がよみがえる。

まずは近場からだ、城や国からそう遠くはないところを探しあ  
たった。けれど、フィレアは見つからず、搜索範囲を広げた。

そして一番最初に発見したカイは、青々とした草に埋もれ、全身  
を血で染めたフィレアに息を呑んだ。

ぴくりとも動かないその体に、カイの不安は増し震える足取りで近づいた。

幸い呼吸はしていた。カイは安堵し、急いで城へと運んだのだ。だが、今思い出すと不思議でなかった。

何も無い草原だ。ましてやここから離れすぎている。そんな場所に一人で、ましてや誰にも告げずになど

「カイ様」

思考の波にとらわれていたカイはローマスの声で我に返った。

「そのとき、周りには誰もいなかったのですか？」

「あ、ああ。たぶん……」

あのときはフィレアのことで頭がいっぱいになり、周りのことをよく見ていなかった気がする。

誰がいなかったかと聞かれれば、素直にいなかったとは言えないだろう。

語尾を濁したカイはフィレアの着ていた服に視線を落とす。

無残に切り刻まれた服は、今現在彼女が着ているものと全く同じもの。

お気に入りだといっていたその服は、念のためにと以前フィレアが二着買っていた。

「姫様……フィレア様は、何の用でそこへ……？」

ぼつりとローマスがつぶやく。

「わからない。でも、フィレア様を斬った奴は俺が見つけ出す」

つぶやいた老医者言葉に、カイは前を見据えて答えた。

その瞳に宿るのは、深い後悔の念。

そんなカイをちらりと見て、わずかに眉をひそめ、諦めたような口調で言った。

「そうですねえ。結局の所、一番動けるのはカイ様とヴェント様だけでしょうから」

「やっぱりそうなるか……。まあ、任せる気もないけどな」

老医者はちいさく頷いた。

代々伝わるローディア家の末裔であり、現神様のフィレア。

一見幸せそうに暮らしているように見えるが、そういうわけでもなかった。

彼女にではなく、この国自体に反感を持つものも少なくはない。そんな者たちから狙われる対象となるのは、今この国の一番上、神様であるフィレア。

それは、記憶を失ったからといって変わるものではない。

そもそもあまり表舞台に立たなかったフィレアの顔を知る民はあまりいない。ある日突然いなくなったことと、記憶を失ったことだけは伝えられていた。

けれど、反感を持つ者にはそんなことは関係ない。むしろこのことを喜んでいるのかもしれない。

何も知らない彼女を、利用できる。

そんなフィレアを真に守れるのは、おそらく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1009x/>

---

楽園の果て

2011年11月23日19時55分発行